『古代アメリカ』21, 2018, pp.103-118

＜調査研究速報＞

高校教育を対象とした古代アメリカ学会の普及活動

渡部 森哉（南山大学人文学部）、井上 幸孝（専修大学文学部）、多々良 穣（東北学院榴ケ岡高等学校）、市木 尚利（立命館大学環太平洋文明研究センター）、森下 壽典（早稲田大学高等学院）、石田 春彦（岐阜県立瑞浪高等学校）、鶴見 英成（東京大学総合研究博物館）

１．はじめに

2015 年 11 月に高校教育検討ワーキンググループを立ち上げ、古代アメリカ研究の裾野を広げるため、また学会での活動を社会に還元するため、それらの方法を検討してきた。本論はこれまでの検討結果を紹介し、また今後の課題を整理することを目的とする。

２．目的と経緯

古代アメリカ学会の活動をさらに展開するため、高校教育における古代アメリカに関する正確な情報を発信し、古代アメリカに関する知識を活用する教育・学習方法、授業内容を教育の現場に提案する。こうした活動を通じ、研究成果を社会へ還元し、考古学的知識と社会を接合していく。以上の目的に従って次のような企画案が練られた。

古代アメリカ学会ではこれまでワーキンググループを設置し、高校の世界史の教科書における古代アメリカ関係の記述を現在の研究成果と照らし合わせ、より正確にするという作業を行った［青山他 2009, 2010, 2013］。古代アメリカ学会から教科書会社に送付した修正案が採用された結果、2013 年の教科書では古代アメリカに関する記述は改善されたが、その後、2013 年から 2018 年度にかけて高校の世界史の教科書における古代アメリカに関する記述にほとんど変更は認められない (註1)。しかしながら、教科書の記述を変更するだけでは、歴史教育の方法を変える、さらには古代アメリカに関する新たな視点が生み出され、授業が改善されることは難しい［多々良 2017］。

そうした現状を踏まえ、古代アメリカに関して何ができるのかを学会側から教育の現場に向けて発信し、高校教育を活性化させる触媒的な役割を果たす活動を始動した。古代アメリカに関するコンテンツを充実させ、正確さを高めるだけではなく、その運用方法を含め、具体的には次の 3 つの方法が提案された。

① 古代アメリカに関する正確な情報を発信する

高等学校の教科書の精査はすでに行われているため、学会の web ページで古代アメリカに関する正確

な情報を発信する、教員向けの指導書の内容を精査する、世界史の参考書・資料集の内容を精査する、Wikipedia など web 上の情報を補足・修正するなどが考えられる。

その場合、将来、例えば日本と古代アメリカの関係を扱った副教材など、生徒が利用できる資料集を編集することを念頭に置き構成を考え、会員に執筆を依頼する。

② 古代アメリカに関する情報を用いた授業案を提示する

世界史、総合学習の方法、展開の仕方を提案する。特に最近では、体験学習やアクティブラーニングが重視されているため、それに沿った授業案を提供する。また受験に必要な情報だけでなく、必ずしも正解が求められていない問題を提示し、「歴史的思考力」を涵養する授業内容も提案する。

案を練る際には、歴史教育だけでなく、「地理」や「公民」などの科目との連携も視野に入れる。また先スペイン期に限定するのではなく、中南米に興味を持ってもらうための入口、きっかけとなる部分に関する授業内容を重点的に開発する。例として、ヨーロッパとアメリカ先住民の出会い、植民地時代の中南米とアジアとの関係などが挙げられる。

古代アメリカ単体で取りあげるのではなく、特に受験で重視される他の文明、地域、あるいは日本と連結させ授業案を提案する。そもそも受験で点数をとるためには古代アメリカについてあまり求められていない状況を、少しずつ改善していく。

授業案については学会の web ページに載せるか、教員用指導書などに掲載するよう教科書会社に働きかける。

③ 授業案を検討する目的でワークショップを開催する。

古代アメリカ学会で提案した授業内容を、高校教員から協力者を募り、現場で実験的に使用してもらう。その結果に基づきシンポジウムを開催する。その際、考古学関係の学会や、日本国際理解教育学会、世界史研究所、高大連携歴史教育研究会、などとの連携を視野に入れる。

またその他の留意事項を次のように整理した。

- 高校教員、生徒の使用頻度などを確認し、作業の優先順位をつける。例えば Wikipedia など、インターネットを用いてどの程度情報を得ているのかどうか、また、一般の参考書・資料集では、どのようなものがよく使われているのかを吟味する。
- 山川出版社の『世界史リブレット』のようなシリーズ本などを参照する教員が多いのであれば、将来そうしたシリーズ本の中に古代アメリカ関係の巻を入れてもらうという企画を出版社に持ちかけることを考える。
- 高校の教員の意見（現場の声）を集める、すくい上げるためにどのようなツールがあるのかを探る。例えば、SNS などを用い投稿欄を設ける、「教科研究会」を通じたアンケート調査などを行う、といったことが考えられる。

３．具体的活動

ここでは 2016 年から 2018 年に高校教育検討ワーキンググループで実施した活動の内容をまとめ、今後の課題を整理する。

3-1.　2016 年度の活動

上に挙げた 3 つの活動計画のうち最も重要なのは、2 つ目の古代アメリカの情報を用いた授業案を提供することであると、ワーキンググループのメンバーの間で合意した。そのため、「文字とは何か —アンデスのキープから考える—」「道具と文明」「生業と文明」という授業案を作成し、高校教員にコメントを求めたところ、時間配分を示す必要がある、アクティブラーニングでは 1 回完結型の題材が必要、学問的価値とポップな話題をどのように結びつけることができるか、といったコメントが寄せられた。

その後、2016 年 12 月 4 日に「古代アメリカに関する高校教育を考える」と題するシンポジウムを開催した。キープを題材に無文字社会における情報の記録・保管・伝達について考える授業［市木 2016］や、マヤ文明の自然環境と建造物の関係を考える授業［多々良 2016］が紹介された。これらの授業の目的は、解答は 1 つとは限らずに生徒が様々な方向から考えることや、現在の定説と比較することで自分たちの考え方を見つめ直すことなどである。アクティブラーニングにはグループ学習が用いられることも多く、その学習形態に沿った授業案を提示することも有効であろう。アクティブラーニングでは知識をどのように活用し、どのように評価するかも考えなくてはならない。

世界史の授業以外では、地理（世界遺産と絡めた地誌）、家庭科（料理）、総合学習などの授業で使える授業案が有効であろう。授業案は 1 つのテーマで 1 つではなく、レベルに応じて選択できるように、あるいは教員がカスタマイズできるような形で提供することが望ましい。高校生が使用できるような資料集や映像資料などがあると便利であろう。最近ではスマートフォンの情報なども活用しており、情報リテラシーを身につけることも重要である。

さらに次年度以降は長期的な活動計画を考える必要がある。2022 年度から始まる予定の「歴史総合」という科目を見据え、古代アメリカの事例を用いて常識にとらわれない歴史的思考力を身につけることが有効であろう。また、今後世界史教科書では、用語を減らす方向に進むと予想されるので、古代アメリカ関係の用語が必要以上に減らされないように働きかけるべきである。

シンポジウムで出た以上のような意見を整理し、「古代アメリカ学会会報」第 41 号には次のようなまとめを載せた［渡部 2016］。

> 高校における実際の教育現場で使用してもらうためには、アクティブラーニングに用いる授業案や、グループ学習に適した授業案が望ましい。また世界史の授業以外にも、地理、家庭科、総合学習でも使用できる授業案を提示できるであろう。また個別でゼミを開いている教員もいるので、それに対応した授業案があると良い。さらに主に都市部では学外授業で博物館などを利用することもあるため、その事前学習としての情報提供も有益であろうという提案がなされた。こうした情報提供が有用なのは、教科教育系の学会に参加する意識の高い教員などであろう。
>
> しかし実際に高校教育における授業が、古代アメリカへの関心を呼び起こすことが多いかというとそうではない。シンポジウム会場にいた人に問いかけたが、古代アメリカに関心を持つきっかけが高校ま

での授業であったという人はいなかった。従って、学会における活動は、古代アメリカに興味をもつ人を発掘するというよりは、学会としての社会還元という意味合いが強いであろう。

文部科学省による新しい高等学校学習指導要領の案では「歴史総合」という科目が新設されることになっている。古代アメリカの事例は歴史的思考を涵養するには適しており、比較文明という方向性で学会は動くのが良いのではないかという提案がなされた。こうした試みを通じて、古代アメリカ学会の活動を社会と接合するという意識を高めていきたい。

3-2.　2017 年度の活動

2016 年度の活動を踏まえ、2017 年度には、授業案を提案し、また Wikipedia などでの正確な情報発信を行う予定であった。そして、授業案を高校教員に提示して反応を見る、高大連携歴史教育研究会などに投げかけるという案が検討された。しかし、高校側は 2022 年度からの次期学習指導要領への対応が気になっており、2022 年に「歴史総合」の科目が新設されることから、現在の教科書をベースとした活動をこのまま継続することがはたして建設的かどうか、という疑念がわくようになった。また後述するように、高大連携歴史教育研究会からアンケート調査の依頼があったため、今後の活動の方向性、段取りを再考することとした。そのため、まず古代アメリカ学会内部だけで議論するのではなく、他の学会の動向も調べ、可能であれば意見交換をすることになった。

情報収集に際しては、考古学、先史学の学会を中心的に検討した。それは、「歴史総合」が近現代史を中心とした内容になると予想されるため、古代アメリカ学会と他の関連学会でそれに対する危機意識を共有したいという背景があったためである。関連学会の高校対象とする活動として、調べた結果は次のようになる。日本考古学協会では高校生ポスターセッションを毎年開催している。日本中国考古学会では特別な活動は行っていない。東南アジア考古学会では学会全体としての活動はないが、会員の個人的活動がある。日本西アジア考古学会では「トップランナーズセミナー」と題して一般向けの講演会、その後の茶話会を 2016 年度より開催している。日本人類学会では、小学生から高校生を対象とする人類学普及委員会があり、積極的な活動がなされ、web ページ上でも情報が公開されている。

情報収集の結果を踏まえ、2017 年 12 月 2 日に「高等学校を対象とした学会活動を考える」と題してシンポジウムを開催した。東南アジア考古学会の会員で、高校生向けの活動をカンボジアで個人的に行っている丸井雅子氏（上智大学）、日本文化人類学会の人類学普及委員会の委員長である松村秋芳氏（防衛医科大学校）をお招きした。シンポジウムの趣旨を、2017 年 10 月に高大連携歴史教育研究会から公表された「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」などと照らし合わせ、高校世界史教育の今後のあり方、それに連動して学会の活動を展開するためどのような選択肢があるのかを考えることとした。

シンポジウムの結果、日本人類学会の組織的活動を見倣うべきであるし、また学会主体でなくとも大学や個人レベルで丸井氏のような活動が可能であるということを認識した。一方で、やはり対応するための活動に携わる人のマンパワーがポイントになることが指摘された。

3-3.　2018 年の活動

2018 年度の活動としてまず、2017 年 11 月に高大連携歴史教育研究会から古代アメリカ学会に依頼があったアンケート調査の回答案を、高校教育検討ワーキンググループで作成することとした。アンケートの内容は、現在の「世界史 B」の教科書の用語精選に関する意見聴取である。ワーキンググループのメンバーで回答案を

作成し、2018 年 2 月 27 日に web 上で回答をした。情報共有のため、回答の内容を補足資料として本報告の最後に載せる。

3-3.1） 『提言「歴史総合」に期待されるもの』の検討

回答案作成の参考とするため、日本学術会議・史学委員会・高校歴史教育に関する分科会による 2016 年 5 月 16 日付けの文書『提言「歴史総合」に期待されるもの』の内容をはじめに検討した。その内容は次のようになっている。

> 新必修科目「歴史総合（仮）」は、歴史の大きな転換に着目し，単元の基軸となる本質的で大きな問いを設ける。発展科目として新選択科目「日本史探究（仮）」と「世界史探究（仮）」がある。

「歴史総合」では「時系列に沿って学び、主題学習を重視する」「15-16 世紀以降の近現代を中心に学ぶ」「世界と日本の歴史を結びつけて学ぶ」「能動的に歴史を学ぶ力を身につける」ことが目的とされている。その具体例として「とりわけ、①文字資料、②図像資料、③工芸品や道具などのモノ、④過去の記憶をとどめる場、などについて、それぞれが持つ性格をふまえ、文書館、博物館、史跡などを実際に訪れる機会も生かしつつ、それらが意味するところを分析する力を獲得することが期待される」とある。

「歴史総合」の構成例を確認すると、「(1)近世以前の世界：16 世紀以前」に関連する項目として、「アフリカに誕生した人類が地球上に拡散し、農業と牧畜による食糧生産を始めて他の生物と異なる進化を始めたこと、さらにユーラシアとアメリカに都市・文字・宗教を核とする文明を築いたさまをみる。ユーラシア東端の中国文明圏、中央のイスラム文明圏、 西端のキリスト教文明圏、南北アメリカの諸文明圏など、多様な文明の存在とそれらの緩やかなつながり、および日本文明の原像を、初期グローバル化の前提としてできるだけ簡潔に見ておく」とある。ここに古代アメリカ関連の情報が含まれている。

また、主題学習の例がいくつか提示されているが、「土着信仰と世界宗教」が挙げられ、「感染症の広がりと海上・航空交通」の例として「コロンブス交換」が挙げられている。さらに、「狩や料理・航海術などの近代科学以前の技術」、「人の移動」といった項目にも関連するであろう。

以上のような方向性を先取りして、古代アメリカ学会が、「歴史総合」の授業案を提示することが効果的であろう。さらに現在のカリキュラムにも合うようにカスタマイズして提示すればより良い。一方、「歴史総合」は近現代中心の内容になる見込みのため、古代アメリカの関係の記述に関しては「世界史探究」の教科書あるいは教員用指導書に対し本学会から提案することが望ましい。「世界史探究」は現在の「世界史 B」がベースとなると予想されるため、これまで実施した教科書の内容検討の延長として位置づけられる。

また、中央教育審議会・初等教育分科会の教育課程部会・高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チームによる 2016 年 6 月 27 日付けの資料 10-1 では、「世界史探究（仮）」の目的は次のようになっている。諸資料を効果的に活用して歴史を考察し表現する。近現代につながる諸地域世界の多様性や複合性を扱い、時間軸（タテ）と空間軸（ヨコ）の変化に着目して理解する。

さらに 2016 年 12 月 21 日の中央教育審議会による文書「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、歴史総合において、「歴史を学ぶ意義や歴史の学び方」および、近現代の歴史の大きな転換である「近代化」、「大衆化」、「グローバル化」の計 4 つの大項目を立てて学ばせることが提言されている（p.135）。

3-3.2） 高大連携歴史教育研究会によるアンケートへの回答

2017 年 10 月に「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」という文書が高大連携歴史教育研究会から出された。現行の「世界史 B」の教科書を対象としているため、2022 年からの新しいカリキュラムの「世界史探究」に接合する内容である。現在の「世界史 B」や「日本史 B」では載っている用語が多く、歴史が暗記科目という性格が強くなっているため、用語を減らし歴史的思考力の育成にふさわしい内容にするという目的でアンケートが実施されている。また、こうしたアンケートが教科書作成にも役立つことが想定されている。

アンケート調査に用いた「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」の用語精選案は、現在 3400-3800 ある用語を 2000 まで減らすという前提で提案されている。それを見てみると、関連する用語として「近世までで個々の時代・地域を越えるキーワード」の中に「古代」「駅伝制」「大航海時代（大交易時代）」「コロンブスの交換」などがある。「アメリカ大陸の古文明」の関する用語には「アメリカ先住民、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、トマト、金、銀、青銅、マヤ文明、絵文字、天文学、アステカ帝国、アンデス文明、インカ帝国、駅伝制、キープ」が挙げられている。「ヨーロッパ世界の拡大」に含まれる用語は「ヴァスコ＝ダ＝ガマ、モルッカ（マルク）諸島、香辛料、ゴア、マカオ、ブラジル、地球球体説、コロンブス、アメリゴ＝ヴェスプッチ、『新大陸』、マジェラン、太平洋、フィリピン、植民地、インディオ、ポトシ銀山、黒人奴隷、大航海時代、世界商品、火砲、銀、商業革命、価格革命、『コロンブスの交換』、近代世界システム」であり、「コルテス」「ピサロ」「ラス・カサス」などの人名が削除されている。「エンコミエンダ制」や「アシエンダ制」なども姿を消している。精選案に載っているキープが削除されれば、キープを用いた授業案の提案は難しくなる。

個別の設問に対する古代アメリカ学会からの回答は、補足資料を見ていただきたい。また全体のアンケートの集計結果は、web ページで公開されている。集計結果を参照すると、古代アメリカ学会から回答した必要な用語の数は多めである。これは、そもそも古代アメリカに関する用語は少ないため、ここからさらに減らされることを危惧した結果であろう。もちろん用語が、一律に減らされるという前提で考えた結果であるが、なくなる用語にどのようなものがあるかも今後検討の必要があろう。

次に「当会提案の歴史系用語精選の提案（第一次）についてのご意見」にどのような記述をしたかを紹介する。

- p.7：「また、世界遺産についても配慮する」とあるが、教科書で取り上げる世界遺産のリストがあっても良いであろう。
- p.9：「遺物・遺跡」とあるが、考古学資料のうち動かせるモノを「遺物」、動かせないモノを「遺構」と呼び、遺物と遺構（両方あるいは片方）が確認される場所を「遺跡」という。
- p.9：「文化・文明」とあるが、「文明」はむしろ社会の一形態であるため、並列しない方が良い。文化は、人類に共通する特徴である。
- p.9：考古学では「領域国家」は「覇権国家」（p.19 で出てくる）という概念とセットで使用されている。他にも「〜国家」という用語が出てくるので（都市国家、主権国家、国民国家）、教科書で国家をどのように分類するのかをまとめてはどうか。
- p.10（p.16、p.17）：「大航海時代（大交易時代）」という用語は日本で使用される時代名称であり、他の言語での時代名称を訳したものではない。「大航海時代」という名称を使用したのは、ラテンアメリカ研

究者の増田義郎氏と岩波書店であった。こうした単語を使用する以上、日本的な歴史認識であるということを踏まえるべきであろう。

- p.10：「駅伝制」という言葉は日本語や中国語では使用されるが、英語やスペイン語などには対応する単語がない。駅伝競走はEKIDENとそのまま使用するそうである。この用語を日本における世界史の教科書に使用することに反対するわけではないが、日本の駅伝制と類似した仕組みが他の地域でも発達したという説明にすべきであろう。
- p.17：「コロンブス交換」は 1972 年にアメリカのアルフレッド・クロスビーが出版した *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences* で提唱された概念である。そもそもこの本は日本語に翻訳されていない。2011 年に出版され、2016 年に日本語訳が出たチャールズ・マンの『1493　世界を変えた大陸間の「交換」』で中心的な用語として用いられているため、それに影響されて選択されたのかもしれないが、この用語が他の国でどれだけ広まっているかどうか疑問である。一過性の流行に乗って、教科書に採り入れるのは軽率ではないか。

p.13 の「アメリカ大陸の文明」の用語についてはつぎのようなコメントを加えた。

- p.9 に「香薬（香料、香辛料）」があげられているので、「トウガラシ」も加えてはどうであろうか。
- p.9 に「表音文字」、「表意文字」という用語が出ているが、それに合わせれば「絵文字」というのは不適切である。「マヤ文字」あるいは「文字」にした方が良い。マヤ文字は日本語と同様に、表意文字と表音文字（音節文字）を組み合わせた文字体系である。
- 「青銅」という用語よりもむしろ、製鉄技術が実用化されなかった、という事実が重要である。
- 「天文学」という用語よりも、むしろ「暦」を発達させたということの方が重要であろう（ちなみに 365 日暦と 260 日暦の組み合わせである）。
- 「アステカ帝国」よりも「アステカ王国」の方が一般的に用いられる。
- 「駅伝制」という用語は、インカ研究では使用されない。インカ帝国では道路網が整備され、そして各地に地方支配の拠点が設置されたが、日本における「駅」とは違った機能である。ちなみに車輪の欠如も合わせて説明されると、道路の意味がよく分かる。
- p.17（p.18）：「新大陸」という用語が挙げられている。元々の用語は、「New World」であり、本来は「新世界」と訳すべきであり、霊長類学などではそうしている。歴史学や考古学では「新大陸」が使用されており、すでに定着しているため、変更すべきであるとは思わないが、世界的には「New World」であることを認識すべきであろう。これも日本的な歴史認識の 1 つの例である。
- p.17：「近代世界システム」は、歴史の 1 つのとらえ方として紹介すべきであろう。「コロンブス交換」も同様である。
- p.20：「クレオール」という用語が 2 回出てくるが、p.21 の「クリオーリョ」と同じ意味である。前者が英語、後者がスペイン語である。記述を工夫した方が良いのではないか。

なお今回のアンケートには直接関係しないが、2018 年 2 月 14 日に公表された、「新高等学校学習指導要領案」の p.80 に「オリエント文明，インダス文明，中華文明などを基に，古代文明の歴史的特質を理解すること」とある。しかし古代アメリカ文明を含める記述が望ましく、可能であれば学会から働きかけるべきである[註2]。

3-3.3） 中学社会の歴史教科書の検討

2018 年に実施したもう 1 つの活動は、高校教育の前提となる中学校の歴史教科書の検討である。これは、従来実施した高等学校の世界史の教科書の検討の延長である。

2018 年の中学校の社会（歴史）の教科書は、東京書籍、帝国書院、教育出版、日本文教出版、育鵬社、清水書院、自由社、学び舎の 8 社から出版されており、それぞれの古代アメリカに関する記述を検討した。ちなみに育鵬社と自由社が保守系の教科書と見なされているが、古代アメリカに関する記述に関しては、各社のスタンスに大きな違いは認められない。また、東京書籍と帝国書院は高等学校の世界史の教科書も出版しており、どのように連動しているかも今後確認する必要があるであろう。

全体として言えることは、①アステカやインカが出てくる箇所に、旧来の発見史観（大航海時代にアメリカ大陸が歴史の舞台に登場する）の影響がまだまだ残っている点、②情報の不正確さが目立ち、古代アメリカに関する正確な知識の普及が不十分だと思われる点である。ただし、②については、西洋関係の事実誤認や不正確な記述も所どころに見られる。

より細かな点では、「アステカ帝国」を「アステカ王国」にするなど現在では主流になっている表記に合わせる方がよいと思われる点がある。また「インド」のような誤解を招きかねない表現は「インディアス」または「アジア」と言い換える方がよい。コロンブスが「信じる」という表現については、事実関係としてはコロンブスが「発見地はインディアスの一部」と正式表明していた（協約上の問題もあり、この立場は変えがたかった）ということを考えれば、「信じていた」のような主観的表現よりも「考えた」という表現が良い。

本学会は「古代アメリカ」を対象としているが、こうした教科書記述の検討の際、大きな問題となるのは、その後の時代（「発見」から植民地時代まで）との関わりをどう捉え、どの程度までそうした時代の記述についても検討するのか否かの判断であろう。「古代アメリカ」に限定して事実誤認や正確な用語などだけをチェックしたり、提示したりするのも一案である。しかし、それだけでは、西洋中心の歴史観が強く影響し続けている現在の教科書記述を考えると、世界史の中でのアメリカ大陸そのものの位置づけを見直すことには容易につながらない。他方、大航海時代なども含めて世界史の見方全体の中でのアメリカ大陸を視野に入れるのであれば、指摘や提案できることも多くなるだろう。その代わり、これを行う場合には、「古代」にとらわれず、複数の 16 世紀以降の専門家が検討に加わる必要があるだろう。

以下、各教科書についてのコメントを載せる。取り上げる順番は採択率の高い順である。

【東京書籍】（2018 年）

- p.102 地図：「16 世紀ごろの世界」では「インカ帝国」「アステカ」とある。「アステカ」を「アステカ王国」とした方が良い。
- p.102 本文：「15 世紀後半に大航海時代が始まり」とあるが、増田の定義では 1415 年のセウタ攻略がその開始とされるので不適切である。同じくポルトガルの航海（西アフリカ～インド）を「大航海時代の先がけ」と表現しているが、これも大航海時代そのものである。
- p.102 本文：コロンブスは到達地を「インド」と考えたとあるが、「アジア」とした方が適切である。
- p.103 本文：「アメリカ大陸が広がり、独自の文明が栄えていました」を「アメリカ大陸が広がり、アステカ王国やインカ帝国など独自の文明が栄えていました」にした方が良い。
- p.103 本文：「アメリカ大陸にわたったスペイン人は、先住民の文明を武力でほろぼした後、銀の鉱山を開発し、農園を開いてさとうきびなどを栽培しました。銀はヨーロッパに運ばれた後、物産を輸入

するためにアジアに持ち出されました。また、砂糖のほか、ジャガイモやトマトなどもヨーロッパに運ばれ、ヨーロッパ人の食生活を大きく変えました」とあるが、この記述では、砂糖とジャガイモ、トウモロコシが並列されており、さとうきびがアメリカ大陸原産と誤解される可能性がある。

【帝国書院】（2018 年）

- p.14 本文：「新石器時代にはいると、大河の流域では農耕が発達し、人々は定住生活を行うようになりました。食料にゆとりができると、食料を管理し、農作業や軍事の指揮をとる、王が現れました」とあり、旧世界を事例に川と文明の関係が強調されている。図の文明の表にアメリカ大陸の文明はないので関連するページを指示することが望ましい。
- p. 88 本文：マゼランは「西へ向かって出発し」「世界一周に初めて成功」とあるが、「太平洋」の語がなく、わかりにくい記述になっている。
- p. 88 欄外２：「コロンブスがインドに到達したと誤解」は「コロンブスがアジアに到達したと誤解」と変更した方が良い。
- p. 89 地図：アステカ王国とインカ帝国の名が記載されているが、その範囲は示されていないので、示した方が良い。
- p. 89 本文：「フィリピンのマニラを拠点にして」とあるが、「フィリピンのマニラを征服して」や「植民地化して」として、フィリピンもスペイン領になったことを示す方が分かりやすい記述になる。
- p.89 写真：「インカ帝国の都市マチュピチュ（ペルー）　けわしい山の奥地にあったため、スペイン人による発見をまぬかれました。神殿・宮殿・貯蔵庫などのあとが残っています」とあるが、正確には宮殿とされる建物は同定されておらず、マチュピチュ遺跡全体が王のものとされている。

【教育出版】（2018 年）

- p.92 欄外下部：「コロンブスは.....インドの一部と信じていました」を「アジアの一部と考えました」と変更した方が良い。
- p.93 本文：「スペインは、独自の文明が栄えていた南北アメリカ大陸に進出して、これを武力で征服し、金・銀の採掘などを進めました」とあるが、鉱山で採掘したのは主に銀であるので「金・」は削除した方が良い。また地図には「アステカ帝国」「インカ帝国」があり、その勢力範囲が図示されているが、「アステカ帝国」は「アステカ王国」とした方が良い。
- p. 93 本文：「イエズス会などが・・・アジアや中南アメリカで活発に布教」とある。フロリダやカリフォルニアなどにも修道会士が布教しているので、「中南アメリカ」は「南北アメリカ」とすべきである。
- p.93 地図：「アステカ帝国」「インカ帝国」があり、その勢力範囲が図示されているが、「アステカ帝国」は「アステカ王国」とした方が良い。
- p. 93 コラム：表題が「ほろぼされた中南アメリカの文明」とあるが、本文には「スペインは・・・南北アメリカ大陸に進出」とある。アステカは「北米」なので、「南北アメリカの文明」とするのが正確である。また、アステカについては「メキシコ高原とその周辺にはアステカ王国」とするのが適切である。「ペルーの高原ではインカ帝国が栄えていました」とあるが、インカ帝国が海岸地帯も支配下に治めていたので「ペルーの山地を中心にインカ帝国が栄えていました」と変更した方が良い。

【日本文教出版】（2018 年）

- p.21 本文：「メソポタミア・エジプト・インド・中国の文明を四大文明とよびます」とあるが、四大文明という表現は高等学校の世界史の教科書では使用されていない。
- pp.60-61 地図：この地図は「13 世紀」なので、アステカ・インカを載せるのは不適当である。15 世紀の図とする場合、「アステカ」を「アステカ王国」変更するのが良い。また「インカの儀式用の黄金ナイフ」とあるのは、明らかにインカよりも前の 11-14 世紀のランバイェケ文化（シカン文化）のものである。
- pp.98-99 地図：「アステカ帝国（14 世紀なかば〜1521 年）」「インカ帝国（1250 ごろ〜1533 年）」を、「インカ帝国（15 世紀なかば〜1533 年）」、「アステカ王国（1428?〜1521 年）」と変更するのが良い。
- p.102 年表：1521 年の「アステカ帝国」を「アステカ王国」とした方が良い。
- p.103 本文：「スペインは、中南米に広大な植民地を獲得し」とあるが、カリフォルニアやテキサス、フロリダなども含まれるため「南北アメリカに広大な植民地を獲得し」とするのが正確である。
- p.103 欄外 2 ：「現在、アメリカでは、先住民族を「ネイティブ＝アメリカン」とよんでいます」とあるが、アメリカ大陸全体のことだと誤解されないように「アメリカ」を「アメリカ合衆国」とした方が正確である。
- p.103 欄外上部：いわゆるコロンブス交換のことが説明されているが、病原菌の移動のような米大陸住民にとって否定的な側面は触れられていない。

【育鵬社】（2018 年）

- p. 102 地図：コロンブスの生年は諸説あるので、「1451?」とした方が良い。
- p. 102 本文：「15 世紀末、ポルトガルとスペインは、イベリア半島からイスラム勢力を完全に追い払うことに成功」とあるが、ポルトガルやアラゴンでは 13 世紀にレコンキスタが終わってしまっているので、「15 世紀末までに」とすべきである。
- p. 102 本文：マゼランの世界周航への言及があるが、スペインが派遣したことが明記されていない。
- p. 102 欄外 1：「アジア大陸の東半分をインドとよび.....コロンブスは.....インドの一部だと信じていた」の部分は、「アジア大陸の東半分」を「ユーラシア大陸の東半分」に、「インド」を「インディアス」とする方が正確である。
- p.103 本文・欄外 ：「スペインは、南北アメリカ大陸の独自の文明をほろぼして大半を植民地とし、大量の金銀をヨーロッパに運び、繁栄を築きました」とあり、欄外に独自の文明の註として「アステカ王国（メキシコ中央高原）、インカ帝国（ペルー高原）」とある。マヤ文明についての記述はない。
- p.103 欄外：「インカ帝国の遺跡マチュピチュ　南アメリカのペルー高原には、太陽信仰と高度な石造建築技術をもったインカ帝国が繁栄していたが、スペイン人によって滅ぼされた」とある。インカ帝国が高原の文明とされており、海岸まで勢力範囲に収めていたこととは矛盾があるため、「南アメリカのペルー高原を中心として、太陽信仰と高度な石造建築技術をもったインカ帝国が繁栄していた」とした方が良い。

【清水書院】（2018 年）

- pp.14-15 本文：「大河が生んだ文明」とある。また「いくつかの大河のほとりでは、大規模なかんがいがおこなわれて、豊かな農業生産が可能となった。こうして特色のある文明が世界各地に発達して、のちの歴史の出発点となった」とある。アメリカ大陸の古代文明が含まれていないので、関連ページを指示するべきである。
- p.92 本文：「ポルトガルとスペインは、15 世紀になると、大西洋を渡ってアジアにいたる航路開拓に関心を.....」とあるが、「大西洋を渡って」は削除した方が良い。
- p.92 図：「アステカ帝国」「マヤ文明」「インカ帝国」とあるが、「アステカ帝国」を「アステカ王国」とした方がよい。また、コロンブスの第 3 回（？）の航路が入っているが、煩雑なため、第 1 回（1492～93 年）だけで良いのではないか。
- p.93 本文：「おなじころ南米中部で豊かな銀山が発見されると」とあるが、p.94 の図に「ポトシ銀山」と明記されているので、「おなじころ南米中部のポトシで豊かな銀山が発見されると」とした方が良い。
- p.93 本文：「マゼラン（ポルトガル人）」の「（ポルトガル人）」は不要である。そもそもコロンブスもスペイン人ではないとされる。
- p.93 欄外：「このころの植民地は、このスペインのように、国民の一部が移住し、移住した土地を移民たちが本国の領土として開拓するものだった」とあるが説明が不適切である。イギリス（北米東海岸）などは概ねこの説明に当てはまるが、スペイン領の主要地域（アステカ・インカ）は全く異なる。

【自由社】（2018 年）

- p.31 写真：「古代のヒスイ文化圏は縄文文化とマヤ文化だけで、日本は世界最古の例である（約 6000 年前）」とあるが、マヤ文化がどこの文化か書かれていない。
- p.34 本文：「このように、金属器、都市、文字などを備えた社会の状態を文明と呼ぶ。また、広い地域にわたる人々を統合し、共同生活を行うしくみを国家という」とあるが、これに従えば無文字社会であった古代アンデスは文明には当てはまらないため、表現を工夫した方が良い。
- p.35 欄外：「文明は大河の周辺で発生したが、四大文明の特徴を示す言葉をすべて書き出してみよう」とあり、本文中にはない四大文明の言葉が使われている。四大文明という表現は高校の教科書ではすでに使用されていない。
- p.112 挿絵：「イエズス会は、とくにアジアでも布教に力を入れた」とあるが、布教に力を入れたのは正しくは「アジアやアメリカ大陸」である。
- p.113 地図：「アステカ王国　16 世紀にスペイン人コルテスによってほろぼされた」、「インカ帝国　16 世紀にスペイン人ピサロによってほろぼされた」とあるが、どちらも勢力範囲が示されていないので場所が正確に分からないため、勢力範囲を図示するのが望ましい。
- p.113 本文：「コロンブス.....大西洋をどこまでも西へ」とあるが「どこまでも」を削除した方が良い。
- p.113 本文：「彼はそこをインドと信じ込んだため」を「彼はそこをアジアと考えたため」と変更した方が良い。
- p.113 本文：「北米大陸の先住民はインディアンとよばれた」を「アメリカ大陸の先住民はインディオ（インディアン）とよばれた」と変更した方が良い。

・ p.113 本文：「.....これをトルデシリャス条約という」は完全に事実誤認である。その上数行で述べられているのは1493年のアレクサンデル6世の大教書による世界分割であり、トルデシリャス条約はその翌年のことである。

【学び舎】（2018年）

・ p.15 本文・地図：「アメリカ大陸では、5000年ほど前に、トウモロコシが栽培されるようになりました。そのころのトウモロコシは、1本の実の長さが約2.5cmで、30粒ほどのものでした。アンデスの高地では、ジャガイモの栽培がはじまり、毒をぬき、保存する技術も発達していました」とある。地図ではトウモロコシ、ジャガイモとも「5000〜4000年前」とある。5000年前だとすると紀元前3000年となるが、ジャガイモがその時期から栽培化されていた確実な証拠はない。
・ pp.32-33 地図：「8世紀頃の世界」の地図にマヤ文明の記述がある。「アンデス文明」を加えても良い。
・ pp.56-57 地図：「13世紀ごろの世界」の地図に、「ミシシッピ文化」「アステカ王国」「チムー王国」「インカ帝国」があるが、インカ帝国は15-16世紀である。ただし、左端の時間軸表示は11世紀末〜15世紀初頭を指しているので、アステカ・インカを含めてもよいとも考え得る。チムー王国はそのままでもよいが、マヤ文明・アンデス文明などの違う表記のものを入れる可能性も考えても良いかもしれない。
・ p. 88 挿絵：アメリカ大陸の鉱山では、アステカ王国のみと線でつながれているが、インカ帝国ともつないだ方が良い。
・ p.90 の地図：「15〜16世紀の大西洋を囲む地域」に「アステカ王国」「テノチティトラン」「チムー王国」「インカ帝国」「クスコ」がある。チムー王国が含められているが、インカ帝国の最大領域が図示されていない。インカ帝国の範囲も図示し、その中にチムー王国の勢力範囲を示すような示し方が望ましい。
・ p.90 本文：サツマイモの伝播の説明に「16世紀にスペイン人が、中央アメリカからフィリピンにもち込み、それが中国へ、さらに琉球へと伝えられました」とあるが、複数の伝播ルートが唱えられているため、断定しない方が良い。
・ p.90 本文：「ついには、アステカ王国やインカ帝国を滅ぼし、宮殿をかざっていた黄金を、残らずスペインにもち帰りました」とあるが、建造物に付属した黄金に限られないので「.....滅ぼし、黄金を残らずスペインに持ち帰りました」とした方が良い。
・ p.91 写真：モチェ文化の土器が「アンデス地方の土器（3〜6世紀ころ）」と載せられている。アンデスの海岸の文化であることを示せばより良い。
・ p. 91 欄外：黒人奴隷の説明では、「先住民人口の激減に伴い」黒人奴隷が導入された点を明示した方が良い。

4．おわりに

高校教育検討ワーキンググループでは、古代アメリカ学会の活動を普及するための検討を行ってきた。しかし、当初設定した目標である、古代アメリカの情報を用いた授業案を提示し、それをweb上で公開する、指導書に掲載してもらうよう働きかける、ことなどはまだ未了である。その前の準備が揃ったという段階である。

高校世界史の教科書は、ここ数年間ほぼ記述内容が変わっていない。それは2022年度から始まる「歴史総合」や「世界史探究」の教科書執筆に力を入れようとしているからだと考えられる(註3)。そのため2022年度からの「世界史探究」の教科書検討を優先的に行う必要がある。今後、いよいよ授業案の提示、高校教員側への情報提供、そしてフィードバックという作業を始めていくことになる。「歴史総合」を見据え、その内容を先取りする形で作業を進めていきたい(註4)。

【補足資料：高大連携歴史教育研究会による「高等学校歴史教科書と大学入試の出題用語の精選基準に関するアンケート調査」に関する古代アメリカ学会からの回答（2018年2月27日回答）】

Ⅳ. 高等学校の歴史系教科書に収録されている用語が改訂の度に増大している傾向についてどうお考えですか。

i）歴史研究の進展の結果として当然

古代アメリカ学会からの回答：4（そう思う）

ii）高等学校での授業時間の制約を考え、用語の精選が必要

古代アメリカ学会からの回答：4（そう思う）

iii）その他のお考えがあればご記入ください。

古代アメリカ学会からの回答：用語のみならず、地図やグラフ、写真などの精選、統一が必要。

Ⅴ. Ⅳ-ii で用語の精選が必要（強くそう思う or そう思うを選択）と回答された方にお尋ねします。高等学校の世界史Bと日本史B（いづれも4単位）における適当な用語数は次のどれとお考えですか。

＊ なお1950年代の世界史、日本史教科書の収録用語数は1500語前後ですが、2014年度の教科書ではともに3400～3800語になっています。

古代アメリカ学会からの回答：a）3000語程度

Ⅵ. 大学入試で出題する用語数を限定する必要があるとお考えですか。

古代アメリカ学会からの回答：4（そう思う）

Ⅶ. Ⅵで出題用語の精選が必要（強くそう思う or そう思う）と回答された方にお尋ねします。大学入試で限定すべき用語数は次のどれとお考えですか。

古代アメリカ学会からの回答：a）3000語程度（教科書に掲載された用語数と同じ）

Ⅷ. 用語の精選を行う場合の次の基準についてどうお考えでしょうか。

i）大学入試の出題用語は、高等学校の歴史系授業で十分説明する時間がないと思われる注や資史料にでてくる用語は除外し、教科書の本文に掲載されている用語に限定すべきである。

古代アメリカ学会からの回答：2）（そう思わない）

ii）大学入試の出題用語は、入試の公平性を配慮して、高等学校で使用している歴史教科書の何割以上の教科書に収録されている用語に限定すべきと考えますか。2014 年時点で使用されていた B 教科書（世界史・日本史とも 11 種）でみた場合の用語数を参照に選択してください。

＊ なお、現行の教科書では世界史 B が 7 種、日本史 B が 8 種となっていますが、用語集計データのある 2014 年度使用の教科書で表示しました。

古代アメリカ学会からの回答：c）7 割以上（世 3132 語、日 3709 語）

Ⅷ. 用語の精選を行う場合の次の基準についてどうお考えでしょうか。

iii）高等学校の歴史教科書においては、時代の大きな流れを説明する概念用語と、特定の時期に起こった事件やそれに関連する人名・地名を表す事実用語を区別し、概念用語を中心としてその説明に必要な事実用語を必要な範囲で精選する。

古代アメリカ学会からの回答：2（そう思わない）

理由）概念用語は研究の進展によって変化するため、それを中心に教えるべきではなく、事実用語と同じ比重で扱うのが望ましい。概念用語は、学生に考えさせるためのヒントとして使用すべきであり、押しつけるべきではない。

Ⅷ. 用語の精選を行う場合の次の基準についてどうお考えでしょうか。

iv）用語の膨張傾向を生み出す要因の一つとして文化史における作家と作品の名前が羅列されている状況があるので、文化史に関してはそれぞれの時代を代表する作家や作品に限定した上で、その作家や作品の特徴をきちんと説明する形で収録する。

古代アメリカ学会からの回答：5（強くそう思う）

Ⅷ. 用語の精選を行う場合の次の基準についてどうお考えでしょうか。

v）その他の基準があれば、記入してください。

古代アメリカ学会からの回答：

単に数を減らせばいいという考えではなく、地域や時代のバランスも考えるべきである。史料の多く残る時代、地域の記述の比重が高くなる傾向にあるので、仮に用語を精選する場合、それ以外の時代、地域に関する用語については同じ比率で減らすべきではない。

Ⅸ. 歴史系用語の精選を行う場合、高等学校歴史教科書の収録用語と大学入試の出題用語の精選のどちらを先行させるべきとお考えですか。

古代アメリカ学会からの回答：a）高等学校歴史教科書

理由）大学入試問題は教科書をベースに作成されるので、教科書の用語が精選されれば、大学入試問題で使用される用語もそれに合わせて少なくなる。

Ⅹ. その他、ご自由にご意見をお寄せください。

古代アメリカ学会からの回答：

古代アメリカ学会では、これまで高校の世界史の教科書に関する古代アメリカ関係の記述を精査し、現在の研究水準に照らし合わせ不適切な記述がある場合は、教科書会社に訂正案を提示してきた。その結果、本学会からの提案が教科書の記述の改訂の際に反映されたこともある。用語を精選する場合、学会としても用語の優先順位をつけるなどの協力はしていきたい。

今回は用語の精選が課題であるが、覚えるべき年号の精選もすべきであろう。どちらが古いかを答えるような問題が入試問題で多いが、むしろ関連のある出来事の前後関係が重要であり、その流れを考えさせるような仕組みが必要であろう。

註

（註 1）　確認できる修正点は軽微である。例えば実教出版の『世界史Ｂ　新訂版』で「マヤ族」「アステカ族」が「マヤ人」「アステカ人」にそれぞれ修正されたことを多々良が確認している。

（註 2）　この「新高等学校学習指導要領案」に対する高大連携歴史教育研究会からのパブリックコメントには、次のように記されている。「Ⅲ　世界史探究について」①　歴史的特質を持った諸地域が交流・再編、結合・変容をへて地球世界を形成していくという従来の世界史Ｂを踏襲した内容構成ですが、やがて地球世界を構成していく諸地域の学習において（内容 B-(３)）、アフリカ、南北アメリカ、オセアニアが欠落しています。通時的に地球世界の形成を学習し、その課題を探究するならば、世界史学習の始めから地球全体を視野に入れて地域を区分すべきではないでしょうか。今回の科目の改変で、生徒が世界の前近代史を学習する機会は、小・中・高の必修科目からは大きく削減されることになりました。なればこそ、世界史探究においては、特定の地域が文化の伝播や支配の対象となってはじめて学習対象となるようなことがないように、配慮すべきと考えます。

（註 3）　多々良が、複数の教科書会社から得た情報による。

（註 4）　2018 年 7 月に文部科学省から「高等学校学習指導要領解説　地理歴史編」が発表された。こうした文書の検討も今後の課題である。

参照文献

青山和夫、吉田栄人、坂井正人、井上幸孝、多々良穣

2009　「古代アメリカの学術情報の普及：高等学校世界史教科書問題、マスコミ報道の改善、研究成果の発信と還元」『古代アメリカ』 12:95-103。

青山和夫、多々良穣、坂井正人、井上幸孝、吉田栄人

2010　「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」『古代アメリカ』 13:31-39。

青山和夫、坂井正人、井上幸孝、井関陸美、長谷川悦夫、嘉幡茂、松本雄一

2013　「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか：新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史教科書の検証」『古代アメリカ』 16:85-100。

市木 尚利

2016　「授業実践報告１：キープでペルーを伝えよう―無文字社会における情報の記録・保管・伝達について考える―」 古代アメリカ学会第 21 回研究大会シンポジウム「古代アメリカに関する高校教育を考える」発表資料（2016.12.4.） 国立民族学博物館。

多々良 穣

2016　「授業実践報告２：古代マヤ文明—マヤ文明における自然環境と建造物の関係—」古代アメリカ学会第 21 回研究大会シンポジウム「古代アメリカに関する高校教育を考える」発表資料（2016.12.4.）国立民族学博物館。

2017　「古代アメリカ文明史の高校授業改善：教科書記述の検討から教科研究へ」『古代アメリカ学会会報』41:5-7。

渡部 森哉

2016　「第 21 回研究大会特別シンポジウム 『古代アメリカに関する高校教育を考える』報告」『古代アメリカ学会会報』41:28-29。

原 稿 受 領 日　2018 年 9 月 20 日
原稿採択決定日　2018 年 10 月 8 日